

# 漢字教育に関する覚書

鈴木 義 昭

## キーワード

漢字教育、連文節、漢字出現率、  
六書を利用した漢字教育、漢字教育の現場にて

## 1. はじめに

日本語教育の中で、漢字教育の占める重要性は、決して小さくはない。漢字が持つ裾野には、語彙・音声・文法といった諸分野が階層をなして入り組み、総合体としての日本語が存在しているからである。それにもかかわらず、日本語教育の現場では、日常の教室作業の中に埋没し、等閑視されてきた感がある。独立した時間を与えられることも少なく、読解教育などの中で、機械的に実施されてきたと言っても過言ではない。この間の事情は、我が国の国語教育に占める漢字教育とも類似した点がある。少数の例外を除けば、日本語教授者側に、国語教育の中で行われる漢字教育の方法が自然に、否、過度に意識されることによって、新たな方法を開発する意欲が削がれていたことも事実であろう。

それに対して、日本語の学習者の側にも、日本語の漢字を自分の母語に用いられる文字とのみ考える漢字系学習者などのように、日本語の文字体系の中でじっくりと腰を落ち着けて学ぼうとする姿勢に欠ける学習者がいたことも事実であろう。しかし、最大の難点は、日本語を教える日本人教師も外国人教師も、漢字が産出した／する、日本語としての膨大な量の語彙をどのように取り扱ったらいいのか、思いあぐねていた点にも遠因を求めてよいであろう。

本稿は、鈴木 [2006] に述べた観点を承け、各論的意味を付加したものであって、筆者が漢字教育の現場で行った事例を挙げながら、漢字教育に求められる幾つかの事柄について考えたものである。

以下、「連文節と漢字との関係」、「漢字出現率について」、「漢字の「六書」

の利用」および、「上級漢字クラスでの試み」の各項目について述べていってみたい。日本語教育の中で、何故、漢字を教えるのか、何故、学ぶかのか、に対する筆者なりの答えの一つと考えていただければ幸いである。

## 2. 「連文節」と漢字との関係

中田祝夫は、中田 [1982] の中で、文節を漢字で始まる A 型文節と、漢字以外で始まる B 型文節とに分け、その割合を算出したことがある。その結果、A 型文節が圧倒的に多い（文節総数 3500、A 型 2718 (77.7%)、B 型 782 (22.4%)）ことを指摘した。このことから、大部分の文節と文節を分けるものは漢字ということになり、それあるがため、分かち書きの必要性が軽減されたと言う。これを言い換えれば、漢字という存在は、文の切れ目を表す（中田前掲書）とともに、漢字によって区切られたそれぞれの語群が意味的関連を持つことを一瞬のうちに理解させる（佐竹英雄・佐竹久仁子 [2005]）、日本語独特のシステムだということになる。

「文節」とは言うまでもなく、橋本進吉が唱えた、「文中の意味を持つ最小文法単位」であり、「音韻に関して一定の特徴を有する」もののことを言う（橋本進吉 1959）。また、橋本は、「文節には必ず詞が一つあり、之に辞がつく事もあり、つかぬ事もある」とも述べる（橋本前掲書）。ここにおける「詞」を漢字と解釈すれば、文節の中（橋本は冒頭と言っていないが）には、漢字が必ず現れることになる。これは漢字という文字が持っている一種の特性であろう。全文漢字ばかりで構成される中国語では、

那边▽来了个∥好少年。（あちらからよきおのこがやって来られます。）  
のように、▽、∥の付いとところで、意味が分けられる。「那边」は、場所を表し、「来了个」は、動作を表し、「好少年」は、動作を行う主体を表す、「存現文」となっている。これらは、後ろでも触れるように、文法的、語彙的な区切りであるとともに、音声における「停頓」、意味の切れ目を示しているわけである（鈴木 [1999] [2002] [2004]）。その意味では、文節と停頓とは、切れ目の機能を担うよく似た構造であると言ってよいであろう。

なお、橋本は、文を構成するものとして、「連文節」の概念を導入している。単なる文節だけで文を切るとしたら、休止が多すぎて却って煩わしくなるであ

ろう。それを避けるためには、文節を大きくした単位が求められよう。連文節がそれである。我々が日本語教育の中で利用するのは、極めて細分化された文節ではなく、一定の長さを持った連文節でなくてはならない。中国語における停頓では、一文を読む速度の速さ遅さによって、長さの単位が自由に伸縮する。

例えば、日本語の初級教科書（早稲田大学日本語研究教育センター [1994]）においては、

1. 山本さんは 日本人です。
2. 森さんは 早稲田大学の 学生です。
3. スタインさんは 早稲田大学の 学生です。(Tortal Japanese)
4. 中村さんの 下宿は 中野にあります。
5. わたしは 毎朝 八時に おきて、いそいで 洋服を 着て、八時半ごろ 朝ごはんを 食べます。(早稲田大学語学教育研究所編・著『外国学生用日本語教科書 初級』1967)

のように、分かち書きがなされている。この分かち書きの箇所が文節の位置と一致しており、結果として、それぞれの冒頭に漢字が配されている（例文のアンダーラインの箇所。ただし、外来語はカタカナ、制限漢字は平仮名になる）わけである。

このことは、同じく漢字を用い、分かち書きを採用しない中国語においても似通ったものとなる。すなわち、中国語のピンイン表記（＝ラテン化文字表記）では、ローマ字が用いられているために、分かち書きをする必要がある。日中両国で、所謂「句読」法は発達したが、分かち書きが発達しなかったのは、ひとえに「漢字」が用いられたためであると考えられる。漢字は、各字が一音以上の音を持っており、その一音は必ず「子音＋母音」の形態を持っている（日本語でも、一単語は子音＋母音の繰り返しの要素からなる）。そのため、中国語は、理論的には「声母（子音）＋韻母（母音）」から成り立っているため、各語の後尾に切れ目を持つ可能性があるからであろう。例えば、

子曰学而時習之不亦楽乎

の文は（『論語』「学而」）、

子曰、学而習之、不亦楽乎。（子曰く、学びて時に之を習う、亦樂しからずや。）

のように訓点が付けられる（訓読される）であろうし、

子曰学而習之 〓 不亦乐乎。（孔子が言うことには、人から教えを受け、それを時々復習することは、何と楽しいことではないかね）。

のように切れ目の記号を付けることもできるのであろう。

「曰」は、後ろに言った内容を示すため、長めの切れ目「▽」が入る。「之」と「不」の間は少し短い切れ目、「〓」が入り、名詞節主語と述語とを分ける切れ目となっている。

また、口頭語（実際の会話）の中では、

我们大学▽有一个〓学生宿舍。（私たちの大学には、学生寮があります。）のように、切れ目を入れることができる。「我们大学」という「場所詞」（主格とすることもできる）の後ろに動詞句「有一个」があり、その賓語「学生宿舍」がくる。

こうしたものが前述の「停頓」というシステムであり、これによって「切れ」が遂行される。書面語においても、标点符号の使用や語の置かれた位置によって、停頓がなされている。日本語では、連文節が一つの単位となり、切れを示しているわけである。

### 3. 漢字出現率について

筆者は予て、一文中の漢字出現率を問題にし、その値を算出することによって、漢文訓読文の遺構を捜したことがある。単純には、一文中に含まれる漢字の出現率が高ければ高いほど、漢文訓読文体に近く、低ければ低いほど、訓読文体から遠い文体になっていると位置付けたわけである。もっとも、漢文訓読文体と断ずるに当たっては、特有の「訓読語」が含まれていたり、漢文の原典の引用等があることを必須とした。林大等 [1982] では、漢字の出現率を「漢字含有率」と命名しているが、筆者による「漢字出現率」の語と比べてみて、和語からの見方であるか、漢語からの見方であるかによって、若干のニュアンスの差異があると思われる。しかし、ほとんど同工異曲であって、さしたる差異はないと考える。

例えば、朝日新聞「天声人語」の三月十日（2007年）を分析する（鈴木 [1999]・[2004]・[2005] 等の方法を用いる）と、

焦げ茶色の鉛筆に、時代を写す標語が刻んである。(23・11・47.8%)

「何んでも大切 いくさの資源」。(15・5・33%)

1945年3月10日の東京大空襲などを記録し、伝えてきた「東京大空襲・戦災資料センター」(東京都江東区)が今月、新装開館した。(63・32・52.4%)

国民学校の教育といった戦時下の庶民の暮らしぶりや、それを破壊した空襲の実相が展示されている。(46・20・43.5%)

となる(( )内は、総字数・漢字数・出現率の順になっている。以下、同じ)。三月十一日(2007年)の「天声人語」では、

温雅な句風で知られた後藤夜半に<駒み見るものありつつ暖かし>がある。(35・12・34.3%)

春先、地面に多彩な命がうごめき出す。(18・8・44.4%)

土を割って出た草花や、這い出してきた虫を、作者は身をかがめ、いつくしむように見つめている。(45・12・26.7%)

となり、平均35.2%となり、両者の平均値は、36.0%となる。

三月十日の同誌「青鉛筆」では、

地域の子どもを犯罪から守ろうと、埼玉県川口氏のシルバー人材センターが9日、自主防犯組織「シルバー見守り隊」を結成し、見回りを始めた=写真。(69・31・44.9%)

会員に参加を募ったところ、60歳以上の男女475人が応募。自転車の前かごに黄色のプレートを付けて、青色帽子と緑色のジャンパー姿で地域を巡回する。(72・31・43.1%)

となり、平均すると、43%となる。

さらに、三月十日同誌「社説」では、

旧日本軍の慰安婦について、「官憲が家に押し入って連れて行くという強制性はなかった」などと述べた安倍首相の発言の余波が収まらない。(64・27・42.2%)

米国のニューヨーク・タイムズ紙は1面で「否認が元慰安婦の古傷を開いた」として、元慰安婦たちの生々しい証言を伝えた。(57・22・43.1%)

米連邦議会下院では、日本に対して公式謝罪を求める決議案が採択に向け

て勢いを増している。(43・23・53.5%)  
となり、48.3%となっている。

三月十一日の「社説」では、

「仕事を続けたいから、社内報で実名を出して認知症だとあかしました。  
(33・12・36.4%)

会社でサポートしてくれる人がほしいのです」(21・3・14.3%)

静まりかえった600人の聴衆に、大阪府の中田新吾さん(42)が語りかけた。(37・12・32.4%)

外見からはわからないが、認知症の一種であるピック病を病んでいる。  
(32・9・28.1%)

となり、27.8%の出現率である。社説の二日間の平均は、38.1%である。少なくとも、コラム執筆の目的は異なるものの、漢字が40数%に亘って出現しているわけである。

では、日本語教科書においてはどうかであろうか。漢字の提出が各級別によって規制されているとは言え、漢字出現率は、漢字の文中における在り方を物語っていると思われる。例えば、早稲田大学語学教育研究所[1969]では、

きょうは、中村さんの誕生日です。(16・5・31.3%)

中村さんのうちの応接間に、佐藤さんとスミスさんとキムさんがいます。  
(33・7・21.2%)

そこへ中村さんが来ます。(12・3・25%)

四人はあいさつをします。(12・2・16.7%)

となり、平均で23.6%となる。

ある中級の教科書(富岡・島共著[1991])では、

わたしの家族は6人です。(12・3・25%)

祖母と両親と兄と妹と、わたしです。(17・6・35.3%)

祖母はお茶の先生です。(11・5・45.5%)

週に一回、家でお茶を教えています。(17・6・35.3%)

とあり、均すと35.3%となる。また、中上級向けの教科書(鎌田等[1998])では、

日本人は買い物民族である。(13・7・53.8%)

例えばアンカレッジ空港の変化は象徴的だ。(20・7・35%)

数年前まではアラスカの一寒村の待合室の感じで、エスキモーの民芸品が少し並べられていたに過ぎなかったが、日本人のヨーロッパ旅行者の増加とともに、急速にへんかしてきた。(82・26・31.7%)

となり、平均では40.2%となる。両者の平均値は37.8%となり、40%をやや下回る。

上級の教科書となると、テキスト本文は、編著者が書き下ろした文章から作家等が書いたままの自然な文章へと変わっていく。前述した朝日新聞の記事等と変わりがなくなると言ってもいい(ただ、作品によっては、常用漢字外の漢字を平仮名に直すことも行われているが)。

いずれにせよ、漢字は日々の生活の中で、一文の何十パーセントを占めつつ登場しているのである。級別による漢字出現率は、あくまで漢字が使用されている現象を述べただけであって、残念ながら、目安として級別を判断する資料を備えていない。今後は、より広範、より正確な結果を求めたいと考えている。

#### 4. 漢字の「六書」の利用

ここでは、漢字教育における、古くて新しい術語である「六書」の利用に注目してみたい。以下に挙げるものは、漢字教育のレベルに応じた「六書」の出現状況を数値化したものである。4級、3級……とは、『日本語能力試験 出題基準』に基づいた級分けである。そこに付したパーセンテージは、『日本語能力試験 漢字ハンドブック』所収の「級別漢字一覧」を利用して、筆者が作成したものである。また、「当用漢字」とあるのは、前掲『図説日本語』による数値であり、「常用漢字表」によらない、「当用漢字」時代の統計ではあるが、参考までに掲げておく。

種類	4級	3級	2級	1級	当用漢字
象形文字	35(42.5%)	32(17.7%)	98(13.0%)	75(8.1%)	216(11.7%)
指事文字	9(11.3%)	0(0.0%)	1(0.0%)	0(0.0%)	10(0.5%)
会意文字	20(25.0%)	65(35.9%)	218(29.0%)	190(20.5%)	413(22.3%)
形声文字	10(12.5%)	82(45.4%)	430(57.2%)	658(71.1%)	1211(65.5%)
転注文字	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	—

仮借文字	7(8.8%)	2(0.1%)	3(0.0%)	0(0.1%)	—
計	81	181	850	923	

さらに、以下は、「教育漢字」の「学年別配当表」の統計である（数値は前掲書による）が、これも参考までに掲示しておく。

種類	一年	二年	三年	四年	五年	六年
象形文字	44(57.9%)	47(32.4%)	24(12.3%)	17(8.7%)	13(6.7%)	25(13.2%)
指事文字	5(6.6%)	—	—	—	—	—
会意文字	15(19.7%)	38(26.2)	53(27.2%)	68(34.9%)	43(2.1%)	48(25.3%)
形声文字	12(15.8%)	60(41.4%)	116(59.5%)	109(55.9%)	139(71.3%)	117(61.6%)
計	76	145	195	195	195	190

現在、日本語の初級段階（4級）では、多くの教科書でイラストなどを利用して漢字教育（象形文字の教育）を行っている。この段階での提出漢字総数、その出現率から見ても、極めて妥当性を持った方法であると考えてよいであろう。四級漢字総数の80字を単純に一学期総時数の15コマに割り振ってみるとすれば、一コマあたり5字分で済むことになるからである。

また、指事文字のほとんどがこの段階で提出されることから考えてみれば、象形文字と同様、イラストなどを用いるのもよい方法である。ただ、この段階において、出現するのが全て象形文字、指事文字というわけではなく、会意文字、形声文字についての最小限の学習をしておかななくてはならないが、過度の説明は、特に非漢字系学生の混乱を生むことになるので注意したい。

例えば、4級漢字中に登場する会意文字を見てみよう（[ ]内は、旧字体。（ ）内は、構成要素である）。それを、

- a) 同じ字を組み合わせたもの、
  - b) 異なった字を組み合わせたもの、
  - c) 組み合わせた字の一つが、その意味を表すと同時に、その音を表すもの、
- のように三分類を行うのも一つの方法であろう（中沢希男 [1978]）なお、該当漢字の後ろに付したアルファベットは、上記三分類を示す。

外 b (タ=月+ト) ・学 b [學] (爻+臼+冫+子) ・間 [間] b (門+日=月) ・休 b (人+木) ・後 b (彳+乚+攴) ・高 b (京+口) ・国 [國] b (口+或) ・左 c (ナ+工) ・書 c (聿+者) ・先 b (止+儿) ・



前 b (止+舟+刀) ・男 b (田+力) ・電 b (雨+申) ・年 b (禾+人) ・  
父 b (丨+又) ・分 b (八+刀) ・北 b (冫+匕) ・名 b (夕+口) ・右 c  
(又+口) ・友 c (ナ+又<sup>ゆう</sup>)

3級レベルになると、象形文字の占めるパーセンテージが次第に低くなり  
(なくなるわけではない)、会意文字、形声文字の出現率が増えてくる。ただ、  
ここで注意しなければならないことは、会意文字の占める比率が最大になり、  
それを解説する必要が出てくることである。後述するように、会意文字と形声  
文字との境界が定かでない点もあり、どちらに認定すべきか、解釈の分かれる  
こともある。したがって、こうしたことを「小学」さながらに解説し、日本語  
教育に利用しようとする、かえって、学習者の混乱を招きやすい。最小限、  
以下の藤堂 [1969]、原田 [1982]、中沢 [1978] 等の解説程度に止めたい。例  
えば、

A 婦—好 女と子供の組み合わせで、女性が子供を大切に育てる姿を表  
している。(藤堂明保 [1969])

休→人+木 立ち木のわきに人が腰を下ろしてやすむ。(原田種成 [1982])

看 「手」と「目」の合字。「手をかざして遠くを見る」意を表す。(中沢  
希男前掲書)

などのような、言葉によるヒントを得れば、忘れ難くなることは事実である。  
それを利用しないことはないのであるが、解説者によって文章等まちまちで、  
方法論が確立されていないというのが現状である。

また、3級漢字の中の会意文字としては、以下のものがある。

安 (宀+女) ・医 [醫] (医+殳+酉) ・意 (音+心) ・引 (弓+丨) ・  
屋 (尸+至) ・音 (言+一) ・家 (宀+豕) ・画 [畫] (聿+田) ・開  
(門+艹) ・寒 (宀+𠂔+人+欠) ・婦 [歸] (自+止+帚) ・去 (大+  
凵) ・教 [教] (爻+子+攴) ・区 [區] (匚+品) ・兄 (口+儿) ・計  
(言+十) ・建 (聿+廴) ・県 [縣] (県+系) ・光 (火+儿) ・好 (女+  
子) ・黒 [黑] (東+火) ・産 [産] (文+厂+生) ・死 (歹+人) ・私  
(禾+厶) ・宇 (宀+于) ・事 (史+吹き流し) ・室 (宀+至) ・質 (所  
+貝) ・写 [寫] (宀+鳥) ・者 [者] (耂+日) ・弱 [弱] (弓+弓) ・  
秋 (禾+龜) ・習 [習] (羽+日) ・重 (東+土) ・所 (戸+斤) ・乗

[乘] (禾+人+人) ・色 (人+卩) ・真 [眞] (匕+鼎) ・森 (木+木+木) ・親 (辛+木+見) ・囟 [圖] (口+囟) ・正 (一+止) ・声 [聲] (殸+耳) ・赤 (大+火) ・切 (七+刀) ・族 (夂+矢) ・台 [臺] (高+至) ・知 (矢+口) ・昼 [晝] (聿+日) ・朝 (艸+日+月) ・度 (席+又) ・同 (凡+口) ・売 [賣] (出+買) ・発 [發] (殳+弓+爿) ・品 (口+口+口) ・別 (冎+刀) ・便 (人+更) ・歩 (止+止) ・明 (岡+月) ・問 (門+口) ・有 (又+月) ・旅 (夂+从) ・料 (米+斗) ・林 (木+木)

以上の ( ) 内の漢字から類推してみても、篆書体から隷書体が変わる、所謂「隸変」があったために、現代の字体を見ただけでは、その形 (象形性)、音 (音価)、義 (意味) を見出すことはなかなか難しい。「雨」系列の語を例に取り上げてみる。

常用漢字中で、「雨」の字形要素を持ったもの (雨冠を持つもの) としては、以下のものがある。

「雨」[四]	: 象形 (白川)	会意 (『新字源』)	象形 (藤堂)
「雪」[二]	: 象形 (白川)	形声 (『新字源』)、	会意 (藤堂)
「雲」[二]	: 形声 (白川)	会意形声 (『新字源』)、	会意兼形声 (藤堂)
「霧」[一]	: 形声 (白川)	会意形声 (『新字源』)	(藤堂)
「電」[四]	: 会意 (白川)	会意形声 (『新字源』)、	会意兼形声 (藤堂)
「雷」[一]	: 象形 (白川)	形声 (『新字源』)	会意兼形声 (藤堂)
「零」[二]	: 形声 (白川)	形声『新字源』)	会意兼形声 (藤堂)
「霈」[一]	: 会意 (白川)	形声 (『新字源』)、	会意 (藤堂)
「震」[二]	: 形声 (白川)	形声『新字源』)、	会意兼形声 (藤堂)
「靈」[一]	: 会意 (白川)	会意形声 (『新字源』)	会意兼形声 (藤堂)
「霜」[一]	: 形声 (白川)	形声『新字源』)	形声 (藤堂)
「霧」[一]	: 形声 (白川)	形声『新字源』)	会意兼形声 (藤堂)
「露」[一]	: 形声 (白川)	形声『新字源』)	形声 (藤堂)

(画数順。[ ] 内は、級別。白川は、白川 [2003]、小川等 [1968] は、同書、藤堂は、藤堂 [1978] を指す)

以上を見て分かるとおおり、全部で12例あるが、三者とも同じ説を取るものは、

「霜」、「露」の2例以外になく、ともに一級漢字のみである。「雪」に至っては、三者とも説が異なっている。したがって、六書の方法は、認定にブレがあるため、初級（四級）～中級（二級）では利用するのは難しい。その点、従来から行われてきた方法である、「部首」による分類は、示唆的である。何故ならば、「部首」は、「六書」を包括したものであるからである。

とは言え、部首は部首で問題がある。例えば、部首としての「門構え」、文字としての「間」を見てみる。「間」は、「門構え」に「日＝月」からなっている。この形式でできているものに、

語種	白川	新字源	藤堂
「門」[二] :	象形	会意	象形
「間」[一] :	会意	形声	会意
(= 間))			
「閉」[二] :	会意	会意	会意
「開」[三] :	会意	会意	会意
「閑」[一] :	会意	会意	会意
「閣」[一] :	形声	形声	形声
「関」[二] :	会意	形声	会意兼形声
「聞」[四] :	形声 (「門構	形声 (同左)	会意兼形声
	え」に	あらず。耳偏)	
「問」[三] :	会意 (「門構	形声 (同左)	会意兼形声
	え」に	あらず。口偏)	
「関」[一] :	形声	形声	会意兼形声

等 10 例が挙げられる。しかし、この中で、説を同じくしているのは、「開」・「閑」・「閣」・「閉」の 4 例のみである。常用漢字だけという狭い範囲ながら、門構え自体に会意文字と形声文字の二種があって、所属する六書が異なっている。さらにまた、音韻的には、「間」系・「閑」系、「閉」系・「開」系、「関」系、「聞」系（耳偏）・「問」系（口偏）、「関」系とに別れている。会意文字とその語彙としての不充足さを補うために整備された形声文字との関係を物語っているわけであるが、「小学」的な詳しすぎる説明は、時として学習者を混乱させるものになる。偏が同じだからといって、必ずしも同じ範疇に入っている

とは限らない点、すなわち「六書」を包括した点には重々注意する必要がある。

2級レベルになると、象形文字の割合がさらに減少し、形声文字の比率が増えてくる。やはり、ここで求められることは、象形文字と会意文字、会意文字と形声文字との弁別であろう。段玉裁は、他の声類に跨ったものを「亦声」としているが、これが「A亦B声」のようになり、例えば「会意形声」・「会意兼形声」となり、各種字典（段玉裁『説文解字注』を手始めとし、『角川 新字源』・『学研 漢和大字典』）などでもこうした中間体を掲載することによって、解決を図っている（頼勤 [1983]、阿武哲次 [1985] 等による）。

以下は、常用漢字中の新「六書」の割合を示したものである（佐藤喜代治主編『漢字百科大事典』「資料編」明治書院 1996 による）。

種類	語数
象形文字	152字 (7.8%)
象形会意文字	39字 (2.0%)
指事文字	10字 (0.5%)
会意文字	210字 (10.8%)
会意形声文字	514字 (26.3%)
形声文字	1012字 (52.0%)

となる。指事文字を特殊なものとして除けば、象形に近い会意、形声に近い会意があってもいいというわけである。会意文字の重要性を証明しているという意味では、このレベルにおける最大の着眼ポイントと言わなくてはならないであろう。所謂「国字」の作字法は、会意の方法を学んだと伝えられるが、逆に会意文字教育に用いるのも一つの方法である。

1級レベルになって始めて、形声文字が70%を越え、常識的には、80%超と言われる出現率に近づいていることが分かる（前掲図表の「当用漢字」の項を参照）。この段階になれば、意符と音符とを注視することによって、漢字の大意と大体の音が分かるようになり、文の意味が取れるようになるであろう。特別な学習法を取るより、日頃筆者が主張しているように、一文の中で、コロキユアルな面をより重視しながら、語彙の一部として、学習してゆくべきであろう。なお、巻末に二級、一級の会意文字一覧表を付したので、参考にされたい。

## 5. 上級漢字クラスでの試み

——主として漢字二字熟語を構成する要素——

以下、筆者がここ数年来、早稲田大学日本語教育センター、上級漢字クラスにおいて試みた嘗試を掲載しておく。こうしたクラスでは、以下に示したような、漢字二字熟語に関わる諸項目を提示し、文中に見られる漢字の音声的な変化について、学生の注意を喚起している。これは言い換えれば、日本語の漢字熟語形成に関わる音声的約束事でもある。漢字系学生の中に時々見られる、漢字は母国語で学んだものでこと足れりとする、学習者、教授者に対する一種の忠告である。むろん、各項目は筆者の新知見というより、そうした総合的、常識的な配慮を持ちたいとする、一種の提案でもある。

### 1) 漢字の一字訓と漢字の一字音および当て字訓のアクセント

漢字の一字訓の読み方は、非母語話者学習者の最も苦手とする分野の一つである。また、そうした一字訓と他の要素の組み合わせも難読語となりやすい。

#### a 二音節のもの

例：① 秋のひと時、文を読むにも飽きました。

② 夏季の牡蠣に、秋季の特産、柿。

#### b 三音節のもの

例：① 菓子屋の向かいが貸家になりました。

② 洋館の一室で、羊羹をごちそうになった。

### 2) 複合語の変音現象（二語以上のもの）

当該語が漢字熟語（一語相当）であることを示すのに、以下のような方法が用いられる（『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会1998）。

#### a アクセントを用いたもの

##### i 前の語のアクセントが変わるもの

例：① このらんは、青鉛筆で記入してください。

あ<sup>1</sup>お+えん<sup>1</sup>ぴつ→あ<sup>1</sup>おえん<sup>1</sup>ぴつ

② 空には、白雲が浮かんでいます。

し<sup>1</sup>ら（し<sup>1</sup>ろ）+く<sup>1</sup>も→し<sup>1</sup>らくも

ii 後ろの語のアクセントが変わるもの

例：① 床の間には、鏡餅が飾っております。

かがみ+もち→かがみもち

② わたしの父は、草野球の名三塁手でした。

くさ+やきゅう→くさやきゅう

b 連濁を用いたもの

i 訓読み+訓読み

例：① 日本の原油は、大型のタンカーで運ばれます。

おお+かた→おおがた

② ここでは、矢印に従って、進んでください。

や+しるし→やじるし

ii 訓読み+音読み

例：① aからcの平仮名を漢字になおなさい。

ひら+かな→ひらがな

② 山桜は、葉っぱが出てから、花が咲きます。

やま+さくら→やまざくら

iii 音読み+音読み

例：① 十の位なら、暗算で答えが出せます。

あん+ざん→あんざん

② ジャイアンツは、ドラゴンズに連敗してしまいました。

れん+ばい→れんばい

iv 音読み+訓読み

例：① この漢字は、訓読みでなんと読みますか。

くん+よみ→くんよみ

② 私と彼女とでは、段違いの実力の差です。

だん+ちがい→だんちがい

c 連声を用いたもの 雪隠

例：① どういう因縁があるのかわかりませんが、深い関連があるようです。

いん+えん→いんねん

② 意味、文法、発音は、三位一体、分かれ難いものです。

さん+い→さんみ

d 転音現象を利用したもの

例：① 今日、雨具のしたくを忘れないようにしましょう。

あめ+ぐ→あまぐ

② わたしのお家の一軒隣は、酒屋さんです。

さけ+や→さかや

e 音便形を用いたもの

例：① 合唱コンクールが近づいたので、熱心に練習しました。

ごう(かふ)+しょう→がっしょう

② 甲板に出て、夜風に当たりました。

ごう(かふ)+はん→かんばん

f ガ行鼻濁音化するもの

例：① 母は、戦後の苦しい時代を思い出しては、泣いています。

せん+ご→せんご

② 授業中、漫画を読んでいて先生にしかったです。学校

まん+が→まんが

g 半濁音化を利用したもの

例：① なかなか活発なお嬢さんですね。

かつ+ぼつ→かっぼつ

② 友人のお父さんから達筆な手紙をいただきました。

たつ+びつ→たっびつ

h 母音の無声化を利用したもの

例：① こんなことは、あなたには釈迦に説法でしたね。

せつ+ほう→せっほう

② 宿題がたくさんあって、たいへんです。

しゅく+だい→しゅくだい

i 音韻削除を施したもの

例：① 十月の第一日曜日は、体育の日です。

たい+いく→たいいく

- ② 鈴木さんは、先週、胃がんの手術を受けた。

しゆ＋じゅつ→しゆじゅつ

j 《参考》母音調和について

一つの単語の中に、二つの母音は共起しない。現代語では、すでに消滅しているため生じないが、古典語を読む時などの参考としたい。

例：① 晝は藍より出でて藍より青し。

あ＋を（あ＋お） あ＋ゐ（あ＋い）

- ② 浅き夢見じ酔いもせず。

ゑ＋い（え＋い）

## 5. おわりに

以上、漢字教育において求められる基礎的な知識を筆者なりの見方から、眺めてみた。これらは、教育実践の中で得られたものであって、特に奇とすに足るものではない。2では、日本語に漢字が登場する蓋然性、3では、漢字「六書」における会意文字の重要性と特異性、4では、漢字の日本語化した読み方の特性について、述べてみた。ご参考になれば、幸いである。なお、本稿では、漢字の二字熟語を主として取り上げた。四字熟語の読み方（アクセントも含めて）については、事例は必ずしも多いとはいえないが、その構造的な多用さゆえ（単なる語の配列から、文化事象の含まれた「故事成語」等までである）に、難しいところがある。特に、上級及び超上級漢字系学生と四字熟語を巡る「音読の問題」については、稿を改めて論じたいと思う。

### 参考文献

- 鈴木 [2006] : 拙論「漢字教育・日中対照研究の歴史と展望」(早稲田大学大学院日本語教育研究科 編 2006)
- 中田 [1982] : 中田祝夫『日本の漢字』(日本語の世界4 中央公論 1982)
- 佐竹等 [2005] : 佐竹等『ことばの表記の教科書』ベレ出版 2005
- 橋本進吉 [1959] : 橋本進吉『国文法体系論』岩波書店 1959
- 鈴木 [1999] : 拙論「初級段階の中国語における発話時の『停頓』について」(早稲田大学日本語研究教育センター「講座 日本語教育」Vol.35 1999)
- 鈴木 [2002] : 拙論「中国語初級段階における発話時の『停頓』について——動詞編」(「早稲田大学日本語教育研究」創刊号 2002)



- 鈴木：拙論「中国語初級段階における発話時の『停顿』について——介詞・関連詞語編」（『早稲田大学日本語教育研究』Vol. 4 2004）
- 林大等 [1982]：林大、野村雅昭等『図説日本語』（角川小辞典シリーズ 6 1982）
- 早稲田大学語学教育研究所 [1969]：早稲田大学語学教育研究所編・著『外国学生用日本語教科書 初級』1969
- 鈴木 [1999]：拙論「徳富蘆花『自然と人生』——美文としての漢文訓読調——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』No.44 1999）
- 鈴木 [2004]：拙論「現代日本語に伏流する漢文脈——中島敦『山月記』——」（早稲田大学日本語研究教育センター「紀要」Vol.17 2004）
- 鈴木 [2005]：拙論「中島敦『李陵』の文体——漢文訓読文体から見る——」（中村等編『表現と文体』明治書院 2005）
- 鈴木 [2006]：拙論「中間言語としての現代語訳——『徒然草』を例として」（早稲田大学日本語研究教育センター「紀要」Vol.19 2006）
- 早稲田大学日本語研究教育センター [1994]：OKANO etc. *TOTAL JAPANESE Reading And Writing* 1994
- 富岡・島 [1991]：富岡・島共著『日本語中級読解入門』アルク 1991
- 鎌田等 [1998]：鎌田等『中級から上級への日本語』ジャパンタイムズ 1998）
- 国際交流基金・日本国際教育協会 [1994]：国際交流基金・日本国際交流協会編『日本語能力試験出題基準』（凡人社 1994）
- アルク日本語出版編集部 [1994]：『日本語能力試験 漢字ハンドブック』（株式会社アルク 1994）
- 中沢希男 [1978]：中沢希男『漢字・漢語概説』教育出版 1978
- 藤堂明保 [1969]：藤堂明保『漢語と日本語』秀英出版 1969
- 原田種成 [1982]：原田種成『漢字の常識』三省堂 1982
- 白川 [2003]：白川静『常用字解』（平凡社 2003）
- 小川・西田・赤塚 [1968]：小川環樹・西田太郎・赤塚忠編『新字源』（角川書店 1968）
- 藤堂明保 [1978]：藤堂明保編『漢和大字典』（学習研究社 1978）

## 付録

### I 常用漢字（二級）中の会意文字

愛・庠・委・位・胃・依・移・育・引・印・因・易・延・欧・奥・科・化・加・可・解・灰・皆・害・各・寒・完・官・関・卷・乾・含・器・季・喜・規・幾・客・救・旧・居・競・共・局・禁・区・具・君・形・係・敬・芸・劇・血・具・件・券・限・庫・固・雇・光・向・好・降・香・更・効・厚・祭・最・際・歳・在・罪・殺・察・刷・札・算・散・參・産・賛・糸・史・師・支・辞・式・湿・実・弱・取・守・受・周・収・柔・宿・祝・述・術・所・初・処・助・商・承・将・召・乘・疊・森・信・寝・吹・数・声・静・制・勢・石・席・隻・折・設・戰・洗・專・占・然・相・争・双・息・則・孫・尊・存・退・替・炭・斷・段・

畜·虫·直·迫·定·伝·殿·鳥·登·到·盜·投·得·突·曇·難·乳·熱·  
農·配·敗·拌·麥·犯·般·比·否·表·秒·貧·負·付·武·舞·封·平·  
兵·並·閉·變·便·放·法·報·夢·鳴·命·綿·役·郵·与·容·乱·利·  
流·留·林·類·戻·列·連·老·勞·和

II 常用漢字（一級）中の会意文字

哀·威·為·唯·尉·逸·影·益·炎·宴·毆·寡·賀·戒·殼·冠·看·勘·  
貫·款·閑·寬·監·奇·姬·既·棄·貴·宜·義·戲·吉·却·及·宮·窮·  
拳·鄉·句·契·啓·慶·兼·獻·爾·顯·故·鼓·顧·吳·孝·攻·康·興·  
衡·剛·獄·魂·災·宰·齋·劑·削·司·旨·至·嗣·疾·執·舍·卸·射·  
赦·積·需·囚·宗·臭·修·就·衆·襲·洪·獸·叔·肅·旬·庶·如·叙·  
匠·尚·涉·焦·彰·丈·冗·条·飾·辱·審·仁·尽·陣·垂·炊·衰·樞·  
寸·聖·窃·宣·扇·旋·薦·善·奏·曹·喪·葬·即·属·賊·妥·耐·泰·  
隊·奪·致·痴·逐·彫·徵·勅·陳·墜·呈·貞·典·展·唐·匿·德·篤·  
豚·尼·寧·霸·伐·罰·班·煩·繁·妃·肥·卑·罷·苗·賓·類·敏·伏·  
雰·奮·保·奉·某·冒·牧·墨·奔·麻·脈·盟·幽·憂·融·庸·抑·羅·  
覽·吏·履·隆·隣·臨·靈·曆·劣·烈